

タイトル：基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」公開シンポジウム「境界/Borders in Africa —メディア・民族・宗教の視点から」

日時：平成24年12月15日（土曜日）午後2時より午後6時、16日（日曜日）午前10時30分より午後5時00分

会場：AA 研大会議室（303）

要旨：別紙参照

プログラム

12月15日 土曜日

14:00～14:10

開会挨拶

14:10～16:40

セッション1

「現代アフリカにおけるメディア・国家・市場」

発表者1 田中正隆（高千穂大学）

「ベナンにおけるラジオと民主化」

発表者2 内藤直樹（徳島大学）

「モバイルマネー・ディアスポラ・空間：ケニア東部におけるソマリ系長期化難民とホストの社会－経済的關係」

発表者3 長岡慎介（京都大学）

「サイバー空間が創り出す新たなグローバル／ローカル経済のかたち：現代に再興するイスラーム経済ネットワークからの探究」

コメンテーター：羽瀨一代（弘前大学）

17:00～18:00

特別セッション「民族音楽にみる境界」

松平勇二（名古屋大学）

「ジンバブエにおけるンビラ作成・演奏方法の伝播と継承」

12月16日 日曜日

10:00～12:30

セッション2

「〈民族〉の分断と共生」

発表者 1 眞城百華 (津田塾大学)

「境界、民族と国際関係：エチオピア・エリトリアにおけるティグライの経験」

発表者 2 村尾るみこ (AA 研)

「共生のなかの境界：ザンビア西部、アンゴラ移住民による土地利用の深層」

コメンテーター：武内進一 (アジア経済研究所)

13:30～16:00

セッション 3

「アフリカにおけるイスラームと境界」

発表者 1 荻谷康太 (AA 研)

「金と奴隷の〈異界〉：9-14 世紀のスーダーン西部における境界認識」

発表者 2 坂井信三 (南山大学)

「19 世紀西アフリカのスーフィー教団と儀礼結社：成長する商業都市における宗教的アソシエーション間の競合関係」

発表者 3 菊地滋夫 (明星大学)

「イスラーム化と憑依霊：現代ケニア海岸地方後背地における想像上の境界」

16:30～17:00

総合討論

閉会挨拶

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

基幹研究「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」公開シンポジウム
「境界/Borders in Africa —メディア・民族・宗教の視点から」報告書別紙

セッション1 現代アフリカにおけるメディア・国家・市場

本セッションでは、近年のアフリカで急速に普及しているメディアが創り出すつながりや場の諸相に焦点をあてることで、グローバル経済のもとでのアフリカの市場・国家・人びとの間の多様で錯綜した関係の諸相を明らかにすることを目的とした。メディアは空間を越えて人びとを結びつけることもあるが、逆に差異を強化したりもする。さまざまなメディアをめぐる動きのなかで、アフリカに生きる人びとの暮らしのあり方はどこに向かうのだろうか。上記の問いに答えるために、さまざまなメディア利用に関する3例の報告をもとに、メディア論者によるコメントをふまえた全体討論をおこなった。

○発表者1 田中正隆（高千穂大学）

「ベナンにおけるラジオと民主化」

近年、欧米圏ではアフリカのメディア状況を伝える論集、雑誌の特集が相次いでいる。2000年代初頭のニュー・メディア研究黎明期をへて、今日のインターネット、携帯電話などの電子メディアが浸透した状況への関心がきわめて高いことを、これらは示している。とくに携帯端末の普及は、人々のコミュニケーションに大きな変化をもたらした。これら端末はラジオやテレビが受信できるタイプが浸透し、とくにラジオをいっそう身近なものにした。マスメディアは移動中や外出先でもアクセスが容易になったのである。これをふまえて、本報告では、ベナン、トーゴでのメディア調査をもとに、視聴者参加番組をめぐるジャーナリスト、オーディエンスの活動について紹介し、考察を加えた。

ベナンにおいて、1960年の独立後、1972年の政変による社会主義体制下にあつて、国营放送局 ORTB は政権の管理下における政策報道が主だった。1990年民主化から、新政権によって1997年に放送電波の自由化政策 *demonopolisation des ondes* がなされた。ORTBは国内各地に放送網を拡大し、複数言語での放送を整備した。一方、多くの民営放送局が誕生したが、その特徴は娯楽性を強め、視聴者参加型の番組を導入して、市民の生の声を放送に多く取り入れた点であった。身近な暮らしに根ざしたあらゆる意見を放送することで、人々の間に自由な対話の可能性を拓いた。

民営局は国营局に比べてリスナーの参加番組が多く、リスナーも積極的に声を寄せる。こうした民営放送番組の一つに「朝の不満 *Grogne Matinal*」がある。これはゴルフ FM で毎朝6:30から30分放送する、開局以来の看板番組である。リスナーが日々の暮らしで感じる不満を電話で話すという視聴者参加番組の典型で、人々の認知度は高い。番組名物のテーマソングでは「表現の自由があるんだ。不満に思うことを叫べ。」と呼びかける。そして「ベナンのデ

モクラシーが進歩するのに協力しようじゃないか。」と歌う。むろんリスナーの電話がすべてデモクラシーについて語るわけではない。だが人々がメディアをとおして社会をどのように捉え、どう関わろうとしているのかが、生の声から伝わってくる。

ベナンのジャーナリストたちに、デモクラシーとは何か、と尋ねると、表現(言論)の自由を第一に挙げる。政治体制によって抑圧され、タブーとなっていた事柄を声に出し、発信することができ、多くの人と共有することができる、それがデモクラシーだと説明する。こうした語りの自由をラジオのリスナーも感じ、自らの仕方実践し始めている。人々はあらゆる場所で携帯端末から番組を視聴し、気軽に放送に意見する。政治家、国家元首も耳にしていると発言したことから、こうした番組はさまざまな局で熱を帯びるようになっている。

ラジオの参加型番組には頻りに電話をかけるリピーターがいる。その典型の H 氏(仮名)は、ほぼ毎日 Grogne に電話をかける。話すべき不満の種はつきない。彼がかけない日は一日が平和であったといわれるほどだ。「良くないことがあったら、本当のことを暴くべきだ。8 年前から電話をかけてる。不正なことがいっぱいある。人にも頼まれてかけることもある。」と彼は言う。放送への参加には時間制限がある。だから、H 氏はかける前に入念に下書きし、準備する。そのような原稿が彼の勤める事務所の棚を埋め尽くしている。仕事の合間での Grogne の下書き、不満の種の事実確認、批判や応援する他のリスナーへの対応など、わざわざ電話カード代を支払ってまでする、単なる趣味ではないようにも思える。

発表ではこうしたラジオ参加の実際を一つの典型例にとらえ、他のリスナーとも比較しつつ、視聴者参加番組に電話するアクティヴ・オーディエンスの特質について考察した。その結果、携帯というパーソナルな機器を用いてパブリックな場に参加する、こうしたオーディエンスの営みは、私的領域と公的領域を越境していることが示された。また、個人の不満が放送を通して他者によびかけられ、同意や承認を求める政治的活動にもつながっていた。以上を通じて、メディアと言論をめぐるデモクラシーがオーディエンスの側でどのように展開してゆくのか、その一端を報告した。

○発表者 2 内藤直樹 (徳島大学)

「モバイルマネー・ディアスポラ・空間：ケニア東部におけるソマリ系長期化難民とホストの社会-経済的關係」

本発表では、ケニア東部のダダーブ難民キャンプを中心とする生活空間において、難民とホスト社会の人びとが 1991 年以降の約 20 年間に、メディアによるモノや情報のやりとりを通じていかなる社会-経済的關係を構築してきたか検討した。そして現代アフリカにおける難民問題の課題である「長期化する難民状態」を構成する国家、国際社会、難民やホスト社会の住民などの諸アクターが相互に葛藤と協力を重ねながら、新たな秩序や生活世界を再構築する過程について考察した。

ダダーブ難民キャンプで暮らす難民は、国際機関や NGO によって提供される援助食・

教育・医療等のサービスを提供されている一方、ケニア難民法によって自由な移動や経済活動を制限されている。このような状況で 20 年間暮らして来た難民は、この場所のことを「檻のない監獄」と語る。

ダダーブの難民を受け入れる人びとは、難民と同じソマリ族である。だが、この地に難民キャンプが形成された直後は、ホストであるケニアソマリによる難民へのハラスメントが多発したという。そこは民族よりも国籍の差異が問題となる場所であった[Ikanda 2004]。

このようなある種のグローバルな隔離空間に長期にわたって隔離されてきた難民の日常生活を見ると、彼らは生存に必要な配給食料があるにもかかわらず非合法の経済活動をおこなっており、現金収入の多くを食費に費やしていることが明らかとなった。また、難民が消費する食材の出所を調べてみると、難民が運営する闇市から調達されていた。ケニア難民法によりキャンプ外に移動できない難民は、ケニア人商人との間に商品の信託販売システムを創出していた。まずケニア人商人が難民に商品を送り、それを難民が販売した後で、原価をケニア人商人に届ける。当初は緊張関係にあったケニア人と難民はゆっくりとではあるが、共生を可能にする社会・経済関係を形成していったと考えられる。こうした支払いにもちいられる送金手段として、これまでソマリはハワラ(hawala)と呼ばれる送金ネットワークを利用してきた。このサービスはソマリ・ディアスポラによってグローバルに展開しており、ソマリアの国家破綻以降に人びとが創りあげたもっとも重要な発明として評価されている (UNDP, 1998)。だが 2007 年にケニアで世界初となるモバイルマネーサービス M-PESA が導入されてからは、こちらのほうが利用されるようになっている。このようにメディアを介した経済活動によって、難民の世界は檻のない監獄を超えて広がっていた。

難民現象は国家と国民の関係が不安定な状況に陥っていることの現れである。またケータイの普及やモバイルマネーサービスの導入は、国家が領域内のモノや情報をコントロールすることをますます困難にしている。だがダダーブ周辺は民族への帰属よりも国籍が意味をもつ場所であった。そして難民は、未来に約束されたソマリアへの帰還に向けた一時的な状態として、ナショナルな場所に留めおかれている。このような隔離空間に生かされる難民による、より広い生活世界の創出をかりうじて可能にしていたものこそ、メディアによる他者とのモノや情報のやりとりであった。

○発表者 3 長岡慎介 (京都大学)

「サイバー空間が創り出す新たなグローバル／ローカル経済のかたち：現代に再興するイスラーム経済ネットワークからの探究」

本報告では、サブサハラ・アフリカ地域におけるイスラーム金融の実践を取り上げ、その実践が新しいアフリカ的な場やつながりの創出にどのように関わっているのか、また、イスラーム金融がそのような新しい場やつながりをいかに作り出しているのかについて考

察を行った。

利子や投機的取引の禁止といったイスラームの経済理念に適ったサービスの提供を掲げるイスラーム金融は、2000年以降、急速な拡大と成長を続けており、サブサハラ・アフリカ地域のいくつかの国においても、近年、イスラーム銀行の設立が相次いでおり、同地域は新たなイスラーム金融市場として関心が高まっている。報告者の分析では、まず、アフリカでのイスラーム銀行設立には様々なアクターが関わっていることを指摘した。代表的なものとして、積極的な資本参加を行っている中東地域のイスラーム銀行、自国や隣国でのイスラーム金融サービスの提供を積極的に始めているアフリカ現地資本のメガバンクを取り上げた。これらのアクターの動きからは、既存の銀行を巻き込んだ新たな越境ネットワークの構築や、ローカルな金融システムの活性化を促していることが明らかになった。また、アフリカのイスラーム金融の実践では、当地で急成長しているモバイルバンキング・サービスへの参入や、需要が高まっている移民・出稼ぎを対象とした送金サービスの提供が見られ、現在勃興しつつある新たなローカル経済の創出にイスラーム金融も積極的に参画していることも浮き彫りとなった。

ところで、近年のイスラーム金融の動向として、サイバー空間を活用したグローバル化が挙げられる。そこでは、世界各地の様々な市場を結ぶことによって実現可能となった革新的消費貸借サービスの登場や、サイバー化したイスラーム金融システムを通じた伝統的制度（ザカート、ワクフ）の再活性化が行われるようになってきている。本報告では、このような新動向を、地理的地域に縛られない（メタ・ジオグラフィカルな）イスラーム経済システムの再興であると捉えるとともに、近代資本主義と同じテクノロジーを使った新たなグローバル経済のかたちを提起しているものだと位置づけた。また、アフリカのイスラーム金融の実践も、このような新たなグローバル経済と連動していることも指摘した。以上の分析から、報告者は、アフリカのイスラーム金融に対して、現在勃興している2つの新たな経済（ローカル、グローバル）をつなぐメディアとしての位置づけを行った。そして、これら2つの位相の絶妙な連動こそがイスラーム金融のアフリカの特徴であると結論づけた。

特別セッション 民族音楽にみる境界

○発表者 松平勇二（名古屋大学）

「ジンバブエにおけるンビラ作成・演奏方法の伝播と継承」

「ンビラ」(*mbira*)はいわゆる「親指ピアノ」である。ジンバブエ共和国では、ショナ族が豊かなンビラの文化を持っている。というのも、ンビラがショナ族の政治・宗教と強い結びつきをもっているからである。言い伝えによれば、ンビラは祖霊もしくは精霊によって生み出され、祖先によって伝えられてきた。それゆえ、なかには「祖先のンビラ」(*mbira dzavadzimu*)と呼ばれるものもある。ショナ族は、憑依儀礼を通じて霊と会話をおこない、

雨乞いや豊作を祈念するだけでなく、首長任命などクランの政治を進める。ンビラはそのような儀礼で演奏され、今日まで祖霊・精霊信仰とともに伝わってきた。

本報告では、ニャンドロー地域（KwaNyandoro）において活動するンビラ奏者に焦点を置き、ンビラの演奏・作成技術の伝播や継承について考察した。ニャンドロー地域のンビラ奏者たちは、ニャンドロー・クランの霊媒師の政治的、宗教的、音楽的影響下で生まれ育っていた。しかし、なかには様々な理由でニャンドロー地域を離れ、他の霊媒師の影響下でンビラの修行を積んだ者もいた。彼らは各クランの境界を越え、他クランの政治、宗教、音楽を学んでいた。

ニャンドロー地域の宗教的中心地マササ村では、年 3 回の農耕儀礼がおこなわれた。この儀礼はンビラ奏者同士の交流の場でもあった。また、他の複数の地域においては、マササ村と同様、ンビラの修行を積んだ奏者が技術の交流や鍛錬をおこなっていた。本報告では、異なる地域で修業を積んだ職人の作ったンビラやその演奏方法について、実演をまじえて比較し、社会文化的境界の重層性や融合性について指摘した。

セッション 2 〈民族〉の分断と共生

アフリカにおいては、植民地支配により確定した国境線が現在のアフリカの諸国家の領域のみならず国内の民族構成も規定した。またこの国境線により民族居住区の分断も引き起こした。独立後のアフリカ諸国は植民地時代の境界を引き継ぎ、国民国家建設という課題を抱え、民族の多様性を越えて国民統合を目指した。他方、国境線画定により分断を経験した諸民族は、アフリカ分割、植民地支配に加え、独立後の国家建設の影響も色濃く受けることとなった。1960 年のアフリカの年から 50 年が過ぎ、グローバル化の渦中で民主化や経済成長が進行してなおも、国境という境界のなかで民族間関係をいかに再編するかという問題はアフリカにとって今も重い課題であり、境界が持つ意味は常に問い直されている。

本セッションでは、国境をまたいで居住する民族を対象に、国境がいかに植民地期以後の人々の実践/主体性に影響を及ぼしてきたのかを、ミクロな視点から具体的に明らかにする。これを通じて、1) 境界に居住する民族が、境界を接する二か国双方の政治や民族間関係、ならびに国際関係の影響を色濃く受けてきた点、2) 国境画定によるアフリカの地域社会への影響は、実際には地域住民らによってさまざまな形で読み替えられる可変的なものでもあった点に注目する。特に、民族の分断と対立が国境を接する国家間の紛争として顕在化した歴史をもつエチオピア・エリトリアの事例と、民族が分断された後、平和的に国民国家形成を進めてきたザンビアの事例とを取り上げることによって、アフリカにおける境界、歴史、国民国家の多様な様相を比較し、民族の分断や共生について多角的に検討することを試みる。

○発表者 1 眞城百華（津田塾大学）

「境界、民族と国際関係：エチオピア・エリトリアにおけるティグライの経験」

植民地分割によりアフリカ大陸の多くの民族が民族の分断を経験した。列強により決定された国境線、それによる民族の分断が現在も多くの問題を引き起こしている。アフリカの独立国と謳われたエチオピアもその例外ではない。エチオピアの周辺地域が植民地支配される過程で、ソマリ、アファール、ティグライなど国境周辺に居住する民族はいずれも分断を経験した。

本報告ではエチオピアとエリトリアに居住するティグライに注目し、国境の設置により生じた民族の分断がティグライまた両国関係に及ぼした影響を考察した。

エリトリアは、30年に及ぶ独立闘争の結果、1993年にアフリカ53番目の独立国となった。現政権は独立闘争の理念を色濃くもつ。エチオピアもエリトリアの独立を承認し、両国関係は良好に見えたが、1998年に両国間で国境紛争が生じた。2000年に停戦協定が締結されたものの両国間の国交は現在も断絶しており、国境も封鎖されている。国境紛争後、エチオピアに居住するエリトリア人、エリトリアに居住するエチオピア人はそれぞれ追放された。エリトリアの独立や国境紛争後の両国関係の悪化を考察するためには、1990年代の両国関係だけでなく、両国が辿った1世紀に及ぶ幾多の政治変動を踏まえてはならない。

1890年にイタリアに植民地化されたエリトリアは、1941年にイタリア支配から脱し、その後はイギリス軍の統治下におかれた。第二次世界大戦終結後に国連でエリトリアの地位を巡り討議がなされ、50年の総会決議によりエチオピアとエリトリアの連邦制が決定された。1952年から62年までエチオピアとの連邦制の下、エリトリア政府が創設されて自治を行った。しかしエリトリア領有を切望するエチオピアが1962年にエリトリアを強制併合したため、エリトリアでは解放闘争が始まり30年以上にわたる内戦が繰り返された。

他方、アフリカ分割により分断を経験したティグライは、エリトリアの処遇を巡る政争の中で政治的に利用され、統合や分断を経験した。イタリアによるエリトリア植民地形成の影響は、植民地支配もさることながら脱植民地化の過程でさらに顕在化し、両国に居住するティグライの分断を深化させる結果を生んだ。両国に居住するティグライは、植民地支配、脱植民地化、国民国家形成の過程で常に翻弄されてきたアフリカの民族を象徴している。

本報告では、エリトリアの独立闘争が開始する前段階である40年代、50年代のエリトリアの地位を巡る国際関係ならびにエリトリア併合をにらんだエチオピアによる政治工作が両国に居住するティグライに与えた影響を、以下の3点から考察した。

第一に、エリトリアの脱植民地化ならびにその処遇をめぐる国際関係とエチオピアのエリトリア併合策を検討し、それらがエリトリアならびにティグライに与えた影響を分析した。

第二にエリトリアにおける自治政府の運営に注目する。総選挙、議会運営、自治の施行

はエリトリアにおける政治意識を形成する重要な要素となった。エチオピア政府によるエリトリア自治政府介入からエリトリア併合の過程を取り上げた。

第三に、1890年のイタリア植民地支配によりエチオピア、エリトリア両国に分断されたティグライの経験を植民地時代から再考する。そのうえで、エリトリア併合をにらんでエチオピア政府が行った政治工作がエリトリアならびにエチオピアのティグライに与えた影響を考察した。

○発表者2 村尾るみこ (AA 研)

「共生のなかの境界：ザンビア西部、アンゴラ移住民による土地利用の深層」

ザンビアは、1964年の独立以降、暴力による政権交代や集団間の大規模な流血事件を経験していない国である。この点で、ザンビアは紛争が繰り返されてきたアフリカの国のなかでも例外的である。そうして植民地時代に画定された国境によって分断され、近代国家に包摂された民族集団は、国民国家形成にむけ、今日まで平和裏に共生してきたといえる。

一方で、民族集団間の関係は必ずしも良好なものではなく、不和についてもしばしば報じられてきた。そしていま、ザンビア西部で、分離独立にむけた緊張が高まっている。それは先の大統領選挙を期に、同地域でかつてロジ王国を建国し植民地期から今日に至るまで独自の伝統を保ち続けたとされるロジが中心となって、一国家としての独立を狙い、にわかに活発化しており、軍隊の出動すら辞さない状況を生み出している。この状況で特に注目すべきは、これまでマジョリティであるロジに統率されていたかのような西部のいくつかの民族集団が、この動きに反対もしくは条件付きで賛成する姿勢を明言したことである。

21世紀に入り、経済成長と民主化の進展が指摘されるザンビアにおいて、西部州という一行政区が、伝統的権威を称揚し、一国家として分離独立しようとする運動の高まりと、そこでみられる民族集団の分裂の様相は、一体何を意味するものであろうか。その要因は、かつて栄えた伝統を復活させるだけではない。例えば、西部州が他州のように国レベルでの経済や政治の進展の後進地域として、雇用機会の不平等や各種インフラの未整備などの課題が残されたままであり、その実態が国や諸外国によるザンビアの政治経済面へのポジティブな評価とは異なっている。これに不満をもつのは、ロジの旧王国組織をはじめ西部州人口の多くを占めるロジだけでなく、その他の民族集団も含む。特に、条件付きで分離独立に同意しているのが、ンブンダとよばれる集団である。ンブンダが分離独立に合意する条件としたのは、ロジとの不平等を解消し相互尊重して共生することである。この条件提示の理由として第一に挙げられたのが、ンブンダが森林を伐採し環境を破壊していること、また彼らの多くが、ザンビアに西接するアンゴラでの紛争を逃れ西部州に住みついている難民であることから、メディアなどでアンゴラへ帰還するべきという発言がなされたことによる。

ンブンダやチョクエ、ルバレ、ルチャジといった民族集団は、19世紀までに、今日のコンゴ民主共和国からアンゴラとザンビア国境付近に南下していた。その後、国境画定により、彼らはアンゴラ、ザンビアにそれぞれ包摂されることとなった。やがて彼らは今日のザンビアの領土へも移住したが、銅の鉱業権を狙い、西部一帯に王国を建国していたロジを優遇した植民地体制と、ロジの伝統的政治体制のなかで、ンブンダの首長による伝統的な政治体制が十分に機能してこなかった。

先行研究では、ロジ王国の寡頭的政治体制が、土地をはじめとする資源分配で重要な機能を果たし、多民族が混住していることが報告されてきた。しかしながら、ンブンダをはじめ、ロジ王国の傘下に編入され、配分された土地を耕作して自給的な生活を営んできたマイノリティの土地利用の実態やロジとの関係の詳細は不明である。ンブンダの伝統的な土地管理体制について詳細は不明であるが、ンブンダが国境画定により経験した分断や、独立後、王国が西部州として国家のなかに統合された後にロジといかなる関係を構築してきたかは、この地域の共生の動態を捉える上で肝要である。

本発表では、ザンビア西部の分離独立がおこるなか、条件付きの賛成を示すンブンダの人びとの土地利用から、共生のなかで民族集団間の差異や分裂、統合がいかん生じてきたか、その歴史的プロセスを明らかにした。そのため、ンブンダをはじめ、ンブンダと混住する他の民族集団の土地利用の根底にあるロジとの権力関係に注目し、マクロな政治経済の変動下におけるザンビア西部、ひいてはザンビアにおける民族集団間関係再編について検討した。以上を通じて、平和裏に国民国家形成をすすめてきたザンビアでの多民族の共生について再考することを試みた。

セッション3 アフリカにおけるイスラームと境界

7世紀のアラビア半島に端を発し、インド洋とサハラ沙漠を越えたイスラームは、遙かサハラ以南アフリカの各地に伝播していく過程で、現地の諸信仰と接触する。そして、この接触面に生じた境界は、宗教という枠組みでアフリカ大陸における境界を考える際、興味深い考察対象の一つとなるだろう。しかし、この境界は、そこに身を置いた人々の信仰と実践が織りなす複雑な動態を含み込む故に、互いに異なる時代・地域において、多様な性質を帯びた存在として現出し、イスラーム史観から導出されるような一義的な境界——イスラームが現地の諸信仰を駆逐し、その社会を染め上げる過程で乗り越えていく境界——に回収されることを拒むのである。

アフリカ大陸の東西における3つの事例を取り上げた本セッションでは、人類学、歴史学、地域研究の視点から、以上のようなイスラームと現地の諸信仰とのあわいに生じる境界の多様性、そして、その境界における人々の思考と振る舞いの諸相を検討した。

○発表者1 荻谷康太 (AA 研)

「金と奴隷の〈異界〉：9-14世紀のスーダーン西部における境界認識」

マリ帝国が最盛期を迎える 14 世紀頃までの文字資料のうち、西アジアや北アフリカで書かれた数多くのアラビア語著作は、同時代のスーダン西部（サハラ以南アフリカ北西部）の状況を比較的纏まった形で伝える貴重な資料群といえる。そして、これらの資料からは、「イスラーム／異教」という基準によってサハラ以北とサハラ以南との分断を想定したアラビア語圏の人々の境界認識のみならず、彼らによって境界の向こう側に追いやられたスーダン西部の人々の境界認識も浮かび上がる。

本報告では、14 世紀までのアラビア語資料の分析を礎に、スーダン西部のムスリム権力者達が、南方の非ムスリムの土地に対して抱いた境界認識を考察し、彼らが直接的な支配領域の南に隣接する地域を、境界の向こう側の「異教の地」として保存することによって、王権の財政的基盤を支えた金と奴隷の継続的かつ安定的な確保を実現していた可能性を検討した。

○発表者 2 坂井信三（南山大学）

「19 世紀西アフリカのスーフィー教団と儀礼結社：成長する商業都市における宗教的アンシエーション間の競合関係」

西アフリカ内陸のマリは、中世期以来のサハラ越え交易をとおしてイスラームを受容した。だがムスリムの担った長距離交易はサバンナの農民社会と直接関係することがなく、当初はイスラームと現地信仰が会合する社会的文脈はなかったと思われる。しかし 17 世紀以降、大西洋岸で西欧諸国との交易が始まる中、内陸でも商業都市と農村をまきこんだ市場が出現し、そこにムスリムと農民が交渉する新しい社会空間が生まれてくる。

ニジェール川中流域の口頭伝承からは、18 世紀末から 19 世紀初めにかけて、繁栄するマルカ・ムスリムの商業都市で、ムスリムのスーフィー・タリーカとバンバラ人の儀礼結社が併存し、拮抗していた様子が見えてくる。西アフリカのイスラーム史では、政治的文脈でイスラームが現地社会を席卷していくジハードに注目が向けられることが多いが、本報告では、これらの伝承の分析から、それとはちがう社会経済史的な文脈で、イスラームと現地信仰とがどのように出会い、どのように勢力を分け合っていたのかを論じた。

○発表者 3 菊地滋夫（明星大学）

「イスラーム化と憑依霊：現代ケニア海岸地方後背地における想像上の境界」

東アフリカのインド洋に面した都市部の住民は、モンスーンを利用して行われていたインド洋交易のつながりを通して、遅くとも 10 世紀頃までにはイスラームを受容していたと言われる。しかし、その後、普遍宗教としてのイスラームが後背地や内陸部のローカルな伝統宗教を改宗に導き、次第に東アフリカ全域が「イスラーム化」していったという見方

は、歴史的事実を照らして成り立たない。内陸部へのイスラームの浸透は地域的に限定されているからである。

では、東アフリカにおける「イスラーム化」は限定的なものに過ぎなかったという理解で事足りるのだろうか。たしかにイスラームを中心とした見方に立てば、そのような整理に収まりそうでもある。だが、裏を返せば、こうした見方においては非イスラーム社会への眼差しが決定的に欠落しているということも指摘できる。

イスラームの側から見れば伝統宗教に固執しているだけのようにも見える後背地社会では、どのような事態が進行しているのだろうか。本報告では、この点を検討するために、ケニア海岸地方後背地のカウマ社会における憑依霊信仰と関連づけられた「改宗」や、それ以外の理由と結びつけられて語られる「改宗」の経緯に注目し、非イスラーム社会内部の微細かつ多様な境界についての考察を行った。

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.